モンステラの育て方

Monstera

サトイモ科 / Araceae

> 切れ込みと窓のような穴が並ぶ大きな葉と、丸い幼葉からその姿へ変わっていく成長のドラマ。中南米の熱帯林で樹をよじ登るサトイモ科のつる植物で、耐陰性があり室内でも育てやすい観葉植物の代表格です。

基本データ	
成長期	夏型（春〜秋生育。熱帯性で休眠はしないが10℃未満で生育停止）
耐寒温度	10℃以上が安全ライン（10℃未満で生育が止まる。デリシオサは属内では比較的寒さに強いが、日本の冬は室内で）
日照	明るい日陰（レースカーテン越し。直射日光は葉焼け、暗すぎると窓あき葉が出にくい）
播種適期	5〜7月（20〜30℃を保てれば室内で周年）
発芽日数	おおむね2〜4週間（目安。遅れる例もあるので1〜2か月は様子を見る）
主原産地	メキシコ〜中米・南米北部・カリブ海域の湿潤な熱帯林（多様性の中心はコスタリカ〜パナマ。デリシオサの野生分布はメキシコ南部〜グアテマラとされる）
難易度	

概要・魅力

モンステラ属（Monstera）は、サトイモ科（Araceae）のつる植物のなかまで、メキシコから中米、南米北部、カリブ海の島々にかけての熱帯林に分布します。属名はラテン語の「異常な・奇妙な」に由来するとされ、葉に開く大きな穴を指したものです。新種の記載が続いており、2024年に発表された中米の改訂では新熱帯に64種が数えられています。属内のグループ分け（節）はDNAの解析で一部が不自然とされたものの、組み替えはまだ行われていません。

ほぼすべての種が、暗い林床で芽生え、樹の幹を見つけてよじ登る**半着生のつる植物**です。木漏れ日と高い湿度、年中暖かい環境で育つ植物なので、乾燥地の植物のように「水を切って締める」「強い日に当てる」という管理は当てはまりません。

モンステラが愛される理由

- **切れ込みと穴の入る大きな葉** — 成長した株の葉には羽状の切れ込みと窓のような穴が並び、圧倒的な存在感があります。
- **幼い葉から大人の葉への変化** — 若い株の葉は切れ込みも穴もない形で、育つにつれて窓あき葉に変わっていきます。
- **耐陰性があり室内向き** — 直射日光の入らない室内でも育ち、栽培そのものは観葉植物の中でも易しい部類です。

代表的な種

- **デリシオサ**（M. deliciosa）— 日本で「モンステラ」といえば主にこの種です。以前は野生の分布がメキシコからパナマまでとされていましたが、近年の分類の見直しでは**メキシコ南部からグアテマラにかけて**と考えられるようになり、コスタリカやパナマの野生の株は別種（M. tacanaensis）とされています。低地から標高2,000mを超える山地の雲霧林まで生え、属の中では生育環境の幅が広い種です。かつて var. borsigiana と呼ばれた型は、現在は本種に含める扱いが一般的です。
- **デリシオサ 'Tauerii'（タウエリー）** — 原種よりコンパクトな系統として流通しています。'Tauerii' は**園芸上の呼び名で、植物学上の名前ではありません**。

- **ドゥビア**（M. dubia）— メキシコから南米にかけての湿潤林に生えます。若い株は丸い葉を樹の幹にぴったり重ねて張り付きながら登る独特の姿（shingle＝屋根板にたとえた呼び名）で、銀色の模様が入ることもあります。樹の上へ登りつめると、切れ込みや穴のある大きな葉に変わります。
- **アダンソニー**（M. adansonii）— 属の基準となる種。中米から南米、カリブ海に広く分布し、主脈に沿って楕円形の穴が並ぶ葉が魅力です。

SEEDSTOCKでは、デリシオサと 'Tauerii'、ドゥビア、アダンソニーの種子を扱っています。挿し木苗と違い、実生なら丸い幼葉から窓あき葉へ変わっていく過程を最初から見届けられます。

> **取り扱いの注意：**全草にシュウ酸カルシウムの針状結晶を含み、犬や猫が噛むと口の中の強い刺激やよだれ、嘔吐を起こします。ペットや小さなお子さまの手の届かない場所に置きましょう。樹液で皮膚がかぶれることがあるので、剪定や植替え、種子を扱うときは手袋を。種小名 deliciosa（おいしい）は熟した果実が食用とされることに由来しますが、**未熟な果実は口やのどに強い刺激を起こします**。育てた株の果実は口にしないでください。

置き場所

モンステラは森の木陰から樹の上へと登っていく植物です。置き場所の基本は**直射日光の当たらない明るい場所**。強い直射は葉焼けの原因になり、大きな葉ほど焼けやすくなります。

光

- 室内なら**レースカーテン越しの窓辺**が標準です。耐陰性はありますが、暗い場所に長く置くと茎が間延びして株が軟弱になります。
- 春〜秋に屋外へ出すなら、軒下や遮光ネットの下などの明るい日陰へ。室内から急に強い光に当てず、数日〜1週間ほどかけて慣らします。

窓あき葉を出すには

モンステラの葉は、株が若いうちは切れ込みも穴もないハート形〜卵形で、成長につれて切れ込みと穴の入る大人の葉（成葉）に変わります。自生地では、樹に登って光が届く高さに達したところで葉の形が変わることが知られています。

- **明るさ** — 自生地での調査では、日向側の葉は日陰側の葉より穴の面積が大きいという結果が出ています。暗すぎる場所では窓あき葉は出にくくなります。
- **登れる支え** — 茎が伸びてきたらモスポールや支柱に誘引しましょう。気根がしっかり活着すると、葉が急に大きくなる傾向があります。ドゥビアは幼葉が平らな面に張り付く性質なので、コルク板や木の板など平らな支えが向いています。
- **株の成熟** — 最初の窓あき葉が出るまでの期間は環境次第で、早くて1年前後、多くは数年かかるのが目安です。

温度

熱帯性で明確な休眠期はなく、暖かければ一年中ゆっくり育ちます。おおむね20〜30℃でよく育ち、**10℃を下回ると生育が止まります**。

- 越冬は**10℃以上を安全ライン**にしてください。越冬できる最低温度は資料によって5〜15℃と幅がありますが、苗やドゥビア・アダンソニーも含めて安全に冬を越させるなら10℃を切らないのが無難です。
- デリシオサは山地にも生える種で、属の中では比較的寒さに強いとされます。それでも氷点下近くでは葉が傷み（葉は−1〜0℃前後、茎は−2〜−3℃前後）、日本の冬の屋外には耐えられないので室内で管理します。
- 秋、最低気温が10℃台前半まで下がってきたら室内へ。夜に冷え込む窓際や、暖房の風が直接当たる場所は避けます。

湿度

高めの湿度を好み、室内では**50〜70%**が目安です。加湿器や、水を張って小石を敷いたトレーに鉢を乗せる方法（鉢底は水面より上に）で湿度を補います。空気がよどむと病気が出やすくなるので、サーキュレーターなどで空気をやさしく動かしましょう。

水やり

水やりの基本は、**表土が乾いたらたっぷり、乾かないうちは待つ**こと。根の病気にかかりやすく、枯らす原因は水不足よりも過湿のほうが多い植物です。

春〜秋（生育期）

- 鉢土の**表面から数cmが乾いたら**、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。
- 受け皿に溜まった水は必ず捨てます。鉢底が水に浸かったままだと根腐れを起こします。
- 水は株元の用土に与え、葉はなるべく濡らさないようにします。

冬（生育が鈍る時期）

- 気温が下がると水を吸う量が減り、根腐れが起きやすくなります。用土が乾いてから**さらに数日待って**与える程度に回数を減らします。
- 休眠するわけではないので、完全な断水はしません。水は室温に近いものを、暖かい日の朝に与えます。

葉水について

葉水は乾燥対策として勧められることが多い一方、葉が濡れたままだと炭疽病などが広がりやすいとして控えるよう勧める資料もあります。行う場合は朝のうちに、夜までに葉が乾くようにしましょう。湿度は加湿器や小石のトレーで上げるほうが確実です。

肥料

春〜秋の生育期に、緩効性の置き肥を2か月に1回程度、または薄めた液体肥料を月1〜2回与えます。用土に肥料の塩類がたまると根が傷みやすいので、濃くしすぎないように。気温が下がる秋以降は控えます。

> 葉がしおれているのに土が湿っているときは、水不足ではなく**根腐れ**を疑ってください。鉢から抜いて根を確認しましょう。

用土・植替え

根は樹皮の割れ目や腐植の中に伸びる性質があり、鉢では**水はけがよく、有機物を含んで適度に水もちのある用土**が向いています。

用土の配合例

- **国内で手に入りやすい資材で**：赤玉土（小粒）7：腐葉土2：堆肥1。
- **市販の土を使って**：観葉植物用の培養土に、バークチップやココナッツファイバーを1〜2割混ぜて通気性を高めます。鉢底には軽石を敷きます。
- **アロイド用土**：オーキッドバーク、パーライト、ピートなどを混ぜたサトイモ科向けの粗めの用土も使えます。乾きが早くなるぶん、水やりの間隔は短めにします。

鉢選び

- 鉢底穴のある鉢を選びます。大株は重くなるので、扱いやすいプラスチック鉢も便利です。支柱を立てる場合は倒れにくい大きさと重さを。
- 大きすぎる鉢は乾きにくく根腐れのもとです。植替えはひと回り大きい鉢までにします。

植替え

- **時期**：暖かくなって生育が盛んになる**4〜6月ごろ**が最適で、遅くとも9月までに。寒い時期（10〜3月）は避けます。
- **頻度**：小さい株は年1回、大きい株は2年に1回が目安です。鉢底から根が出る、水がしみ込みにくい、乾きが極端に早い、といった様子が植替えのサインです。
- **植え付けの深さ**：気根の出た茎は、最初の節の少し上まで埋めても腐りにくいとされます。ただし伸びている芽先は埋めないようにします。
- **養生**：植替え後1〜2週間は直射日光を避けた明るい日陰で休ませます。

気根の扱い

茎の節から伸びる太い気根には、樹皮にしがみつく根と、地面に向かって伸びて水や養分を吸う根の2種類があります。邪魔なら切ることもできますが、できるだけ残し、モスポールに沿わせたり鉢土に導いたりすると株が安定します。無理に曲げると折れるので、やさしく誘導しましょう。

> 作業時は手袋を。切り口から出る樹液はシュウ酸カルシウムを含み、かぶれることがあります。

発芽のさせ方

モンステラは挿し木で殖やされることが多く、種から育てる情報はまだ多くありません。発芽を調べた学術的なデータもほとんどないため、ここで紹介する温度や日数は、販売者や栽培者の経験から得られた**目安**です。それでも種子が大きく扱いやすいので、ポイントを押さえれば実生に挑戦しやすい植物です。SEEDSTOCKで扱うデリシオサや 'Tauerii' は、サトイモ科の実生の入門にも向いています。

種子の特徴（フィロデンドロンとの違い）

- **種子が大きい**：種子は3〜10mmほどあり、同じサトイモ科のフィロデンドロン（1mm前後）とは別物の大きさです。
- **暗い林床で芽生える**：野生では、暗い林床の土の上で発芽します。フィロデンドロンのように「光が必要なので覆土しない」と考える必要はなく、**浅く覆土**して乾燥を防ぎます。
- **新しいうちにまく**：種子の寿命は資料によって見解が分かれ、はっきりしたことは分かっていません。届いたら長く置かず、**早めにまく**のがおすすめです。

播種の適期と温度

自然の気温で管理しやすいのは**5〜7月**。ヒーターマットや育成ライトがあれば一年中まけます。発芽温度の目安は**20〜30℃**です。

1. **種子の下準備** — 果肉が残っている場合は、手袋をして取り除き、水で洗います。果肉は刺激があるうえ、残るとカビの原因になります。ぬるま湯に半日〜1日ほど浸してからまく方法もありますが、必須ではありません。
2. **播種床を用意する** — 清潔な種まき用土やピートモス、水苔などを容器に入れ、あらかじめ全体を湿らせておきます。種子が大きいので、セルトレーや小さなポットに1〜数粒ずつまいてもかまいません。
3. **種子を置き、浅く覆土する** — 種子どうしの間隔を空けて並べ、**種子が半分〜ほぼ隠れる程度**に浅く覆土します。深さはあくまで目安で、深く埋めすぎなければ大丈夫です。
4. **湿度を保つ** — 透明なふた付き容器やラップで覆い、**直射日光の当たらない明るい日陰**に置きます。直射が当たると容器内が高温になり、種子が傷みます。
5. **温度を保ち、換気する** — ヒーターマットなどで20〜30℃を保ちます。1〜2日に1回はふたを開けて換気し、用土の表面が乾いてきたら霧吹きで湿らせます。水浸しの状態が続かないようにします。
6. **発芽を待つ** — 新しい種子なら、**おおむね2〜4週間**で発芽が始まるのが目安です。遅れて芽を出すこともあるので、1〜2か月は温度と湿度を保って様子を見ましょう。カビた種子は見つけ次第取り除きます。

7. **発芽後は少しずつ外気に慣らす** — ふたを少しずつずらして換気を増やし、数日〜1週間かけて外します。一気に開けると幼苗が急な乾燥で傷みます。
8. **葉が開いてきたら鉢上げ** — 根を崩さないように1株ずつ小鉢に移し、成株と同じ用土を細かめにして植えます。鉢上げ後も明るい日陰で、湿度を高めに管理します。
9. **1年目の冬は暖かく** — 実生苗の初期成長はゆっくりで、暖かさと湿度を必要とします。冬は成株より暖かい場所に置き、生育を止めないようにしましょう。

実生苗の最初の葉は、切れ込みも穴もない小さな丸い葉です。**これは異常ではなく、モンステラの正常な姿**。株が育つにつれて、切れ込みの入った葉、穴のあいた葉へと少しずつ変わっていきます。なおドゥビアは、芽生えのころに葉のない糸のような茎を伸ばし、その後に丸い葉を出す独特の育ち方をします。

病害虫・トラブル

モンステラは丈夫な植物で、トラブルの多くは**過湿による根腐れ**と、乾燥や風通しの悪さで増える**害虫**です。

根腐れ・茎の腐れ

株がしおれる、株元の茎が腐る、根が黒褐色でぶよぶよになる、といった症状が出ます。特に気温の低い時期に起きやすいトラブルです。鉢から抜いて傷んだ根を取り除き、新しい水はけのよい用土に植え直します。受け皿に水を溜めない、冬は水を控える、が予防の基本です。

葉の病気

- **細菌による斑点** — 黄色く縁取られた暗褐色の斑点ができ、水はねで広がります。病斑のある葉を取り除き、株どうしを詰めて置かず風通しをよくし、低温を避けます。
- **炭疽病** — 葉の縁から黄色くなり、やがて褐色に枯れ込みます。葉が濡れたままの状態や葉の傷から広がりやすいので、霧吹きは控えめにし、傷んだ葉は早めに切り取ります。

害虫

- **ハダニ** — 乾燥した環境で増え、葉裏から吸汁して葉に白いかすり状の点を残します。葉裏を中心に水で洗い流し、多い場合は薬剤で対処します。
- **カイガラムシ・コナカイガラムシ** — 一年中発生し、吸汁で葉が黄ばみ、排泄物からすす病を招きます。見つけた株は隔離し、綿棒やブラシでこすり落とします。
- **アブラムシ** — 柔らかい新芽に集まります。早めに洗い流すか薬剤で対処します。
- **アザミウマ（スリップス）** — 葉の表面を削って吸汁し、銀白色の傷跡を残します。早めに薬剤で対処します。

生理障害

- **葉焼け** — 直射日光で葉が白〜茶色に焼けます。明るい日陰へ移し、光を強くするときは少しずつ慣らします。
- **茎が間延びする・株が軟弱** — 光不足です。より明るい場所へ移します。
- **低温障害** — 冷え込みで葉が傷みます。10℃を切らない場所で管理します。
- **葉に切れ込みや穴が入らない** — 多くは**株がまだ若い**ためで、病気ではありません。そのうえで、明るさが足りているか、登れる支柱があるかを見直しましょう。

実生苗のトラブル

発芽から幼苗の時期は、カビと立枯れに注意します。清潔な用土と容器を使い、こまめに換気し、カビた種子や倒れた苗は早めに取り除きます。

犬や猫が葉をかじると、シュウ酸カルシウムで口の中が強く刺激され、よだれや嘔吐を起こします。噛んでしまったら口の中の植物片を取り除き、速やかに動物病院を受診してください。

栽培メモ

モンステラの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp